

資料紹介

『香の霞集』

多 久 島 澄 子

はじめに

佐賀美濃派俳壇の道統は、初代十知庵苔峨（花房良庵）から二代無漏庵菊亮（副島佐次右衛門）、三代麓庵海左（成富氏）、四代十方庵画山（観照院僧侶雲左坊）、五代耳風坊竹如亭伊此（深江種徳）、六代万傾園麦太、七代南山亭友恕仙（於保元明）と続き、これに並立して、柳下園其翠の一派が活動した。こちらは、初代柳下園其翠（坂井利右衛門）二代雪馨園一路、三代交簾舎（浣花園）里溪、四代二蝶園花園（花眠）と続いた。また、初代苔峨（佐賀藩藩医）に美濃派俳諧を伝えたのが白雲戸一路と至元坊兔夕で、その場所が伊万里であり、時は宝暦七年（一七五七）七月末であったと、田中道雄氏は述べておられる^①。

平成三〇年二月四日、佐賀市の洋学堂^②で、天保九年（一八三八）刊行、西肥佐嘉路兮編、竹仙居民路居士追善『香の霞集』を見せてもらった。その一〇丁裏面、伊万里の欄に、文路と古童の名を発見した。文路とは、伊万里美濃派俳壇二代目宗匠呉雪庵文路、俗名一番ヶ瀬啓右衛門で、紙商で財を成し、文政一二年（一八二九）春、紀行『世事の凍解』を編み出版した^③。古童とは、文路の文台を受継ぐ三代目宗匠半升庵鼎山、俗名中村勘二の若き日の俳名である^④。早速、購入した。

田中道雄氏の「佐賀美濃派刊行俳書目録」の五七冊^⑤、と大内初夫氏の「九州古俳書目録」七四一冊の中に収録されているだろうと調べてみたが、そのどちらにも『香の霞集』は、含まれていない。

竹仙居民路は、天保九年（一八三八）二月二七日に六四歳で没しているので、安永四年（一七七五）の生まれと推察される。『香の霞集』の詞書には、佐賀美濃派四代宗匠雲左坊（十方庵画山）天保一一年一〇月五日没が、竹仙居は「今の宗匠万傾園主の補佐の一人」と書く。識語は六代万傾園麦太（天保二年立机）が、民路とは「莫逆の交り」と言い、「其靈前に香花を備へ闕伽の水をも手向はやと」飯盛の里なる常照精舎（妙光山常照院カ）を訪れたと書く。民路も麦太も俗名が不明である。

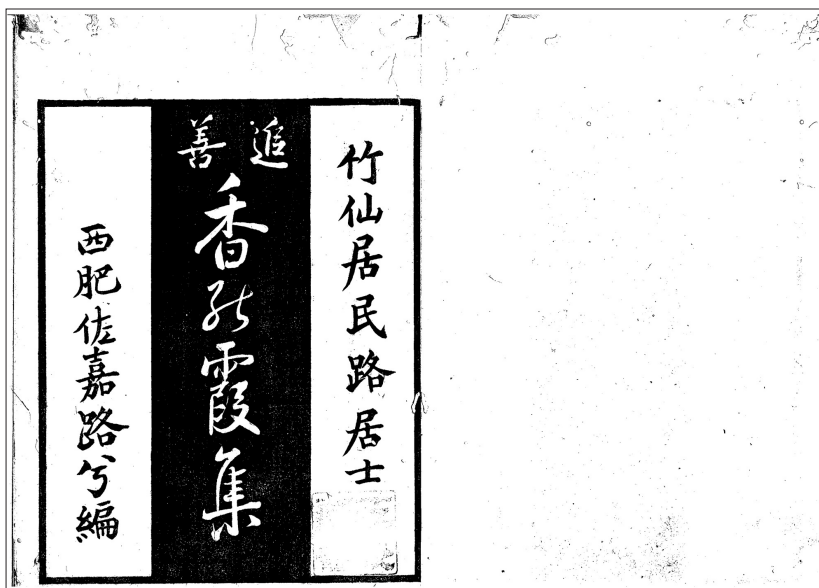
右の次第から、『香の霞集』翻刻は、天保九年の佐賀美濃派俳壇の様子を知るうえで意義があると考えられる。

一、翻刻

凡例

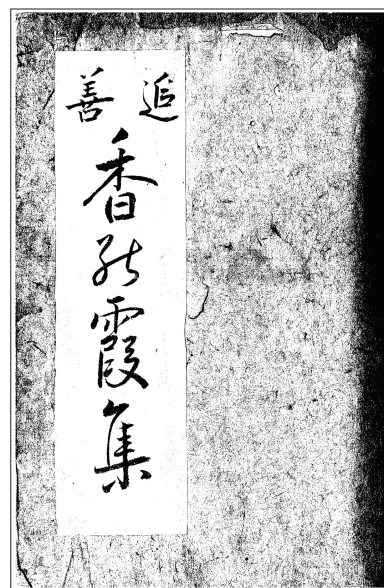
一、翻刻に際し、俳名等固有名詞を除き、旧字体・俗字体は常用漢字に改めた。新たに句読点を加えた。

一、難読文字に振り仮名を振った。この場合は（ ）の記号で囲んだ。



扉

見返し



表紙

四季遺吟
 春雨や庭にたよふ花筏
 優婆塞の麦の隣や芥子坊主
 きりくす押へてハ又取逃し
 はつ雪やけさこそと着る東坡笠



「扉

「見返し

「表紙

念ふ香の霞や凝ん紫雲とも
 春向は助郷馬も数殖て
 まあつい帳面うすい帳面
 鉄槌かすへりて釘を打ゆかめ
 此子にとふそ驥方ても
 もふ残る暑さも退て月の比
 浪の浜路に鱸つる舟
 冷しいよい口からの眼鏡壳

女生 路兮
 一相 其生
 其濤 路兮
 雨琴 其生
 石席 路兮
 指流 其生
 推和 路兮

二ウ

舟仙居の主英ハ、ひとかたならぬ親友にして、長の病床にも折々伽となり、
 留杖の時にハ寐物語りの相人ともなりしか、此春にいたりて所勞一際うち
 おもりけれハ、神佛の祈りハいふもさらに、医療ハあれ是手を尽されし甲
 斐も見へす、天然の時やきさらき廿七日になん終に黄泉の旅路に趣むかれ
 し悲しさハいかんともしかたなく、烏兎速にめぐりてけふや初忌日なれハ、
 在世のたのしみなる五七五の追善会を催さる、孝子路兮雅士のこゝろさし
 を感して、諸雅英もろとも霊床下に夏花を備へ、
 つら／＼思へハ、今の宗匠万頃園主の補佐の一人たる其名譽こそまことに
 千歳不朽なる風雅の功しの花にして、もつとも仰くへき此日の手向にそあ
 りけらし

雲左坊

二オ

扉裏

右

竹仙居
民路

「扉裏

かも苦のけん 静へ庖瘡神
 苗さくあけほの、空あかくと
 せしれすく穿くくけの瘦畑
 客撰ミするハ何国も廓の常
 やりてハイそき立る身仕廻
 吠度した事と油のシミかぬけ
 きのみも長閑けふも長閑さ
 花盛り気のむく方へ歌まくら
 おわらひ草に上ふ草餅
 二オ
 笥から伝ふ流れの清らかに
 夜の間土竜のいたつら
 取あへすまつ廻し符を書いてやる
 小便にたつ碁の相人達
 ちらくくと雪ちらくくとく
 年木こる音答ふ研の
 それとなふ恪気女房を焚付る
 中を直すもやはりお銚子
 ほし店の右と左にうちむかい
 富月

三ウ

かも苦のけん 静へ庖瘡神
 苗さくあけほの、空あかくと
 せしれすく穿くくけの瘦畑
 客撰ミするハ何国も廓の常
 やりてハイそき立る身仕廻
 吠度した事と油のシミかぬけ
 きのみも長閑けふも長閑さ
 花盛り気のむく方へ歌まくら
 おわらひ草に上ふ草餅
 二オ
 笥から伝ふ流れの清らかに
 夜の間土竜のいたつら
 取あへすまつ廻し符を書いてやる
 小便にたつ碁の相人達
 ちらくくと雪ちらくくとく
 年木こる音答ふ研の
 それとなふ恪気女房を焚付る
 中を直すもやはりお銚子
 ほし店の右と左にうちむかい
 富月

三オ

都友
 東島
 呂水
 呂山
 菊培
 一方
 東左
 以夕
 茶白
 烏麦
 橘壽
 菊子
 東郭
 現夢
 佳山
 茶朝
 可丈
 富月

「三ウ

「三オ

名護屋ハ江戸に似たり
 いさ、かな隈さへなしに月の照
 かけてたのしむ床の穂薄
 茸狩に温泉ハつけたりの遊ひ連
 染の流行のひとしきりつ、
 ひいやら、ひやらと鶯の舞て居り
 何して太郎冠者ハ遅いそ
 遠近の出会いも法の花供養
 奠茶に備ふ臙餠頭

礼舎
 魯々
 冬扇
 花眠
 伯和
 一馬
 滄洲
 文翅
 魚潜

四才

名護屋ハ江戸に似たり
 いさ、かな隈さへなしに月の照
 かけてたのしむ床の穂薄
 茸狩に温泉ハつけたりの遊ひ連
 染の流行のひとしきりつ、
 ひいやら、ひやらと鶯の舞て居り
 何して太郎冠者ハ遅いそ
 遠近の出会いも法の花供養
 奠茶に備ふ臙餠頭

礼舎
 魯々
 冬扇
 花眠
 伯和
 一馬
 滄洲
 文翅
 魚潜

四ウ

名護屋ハ江戸に似た所なり
 いさ、かな隈さへなしに月の照
 かけてたのしむ床の穂薄
 茸狩に温泉ハつけたりの遊ひ連
 染の流行のひとしきりつ、
 ひいやら、ひやらと鶯の舞て居り
 何して太郎冠者ハ遅いそ
 遠近の出会いも法の花供養
 奠茶に備ふ臙餠頭

右歌仙行
 慈父君、長のいたつきも今一度快復の期を神佛にいのりし甲斐もなく、
 ことし天保九戌の睦月はしめより加症に悩ミ給ひ、終に如月の末空くな
 り給ふより、こしかたの高恩なと思ひ出し今さら孝養のたらざる事をか
 こち、断腸の悲歎に寝食も安からず、その喪に籠りて
 悌のしたはし春の夢臙

路兮
 令兄竹仙居の尊霊や、若冠の比より孝悌忠信の道に心かけ厚く、その余
 隙にハ風雅をたのしみ給ひしか、不幸に「して病身となり、官を辞し世

四ウ

争ひも君子やむと乃花合指流
 余興の小盃もなかり日 伯和
 かつふりと苗代の水懸り居て 茶白
 大仙行末略
は本法雅英の恵ミ給ひし追悼の高吟数多あれとも、事繁けれハ略し侍
 兼て耳にふれし各の秀句を爰に出して此小冊の飴りとす
 佐嘉

五ウ

賢伯民路尊靈身まかり給ひしを追悼し奉りて
 散てちらぬ其名芳し花の兄 呂水
 亡き人の噂にいと、春寒し 呂山
 余興
 争ひも君子やむと乃花合指流
 余興の小盃もなかり日 伯和
 かつふりと苗代の水懸り居て 茶白

五オ

事をはなれ、月雪花の折々には例に親しき雅友を招きて会席を設け、
 こゝろ静に老を養ひ給ひしに、凶らすもことし陸月のはしめより病打
 もり、六十四歳を一期として終に黄泉の旅路に赴き給ふ事を悼み奉りて

散てちらぬ其名芳し花の兄 呂水

賢伯民路尊靈身まかり給ひしを追悼し奉りて

亡き人の噂にいと、春寒し 呂山 「五オ

余興

争ひも君子やむと乃花合指流

余興の小盃もなかり日 伯和

かつふりと苗代の水懸り居て 茶白

右歌仙行末略

此外諸雅英の恵ミ給ひし追悼の高吟数多あれとも、事繁けれハ略し侍
 り、兼て耳にふれし各の秀句を爰に出して此小冊の飴りとす

佐嘉

「五ウ

船ノ室や掃く細、自在竹
 投出すやうに窓から燕かな
 暖や夜なから降る雨静
 かすむ灘や白帆のさきは又かすミ
 二度来ても広野にたらぬ時雨哉
 世の浮気しつめて後や遅さくら
 入相の鐘ハものかハ鹿のこゑ
 五月雨や烟草脂濃く思ハるゝ
 から堀となる村裏や枯柳

以夕 静和 東島 菊培 烏麦 伯和坊 一閑 茶白坊 橘寿

六ウ

船に寝て見る空高し星月夜
 木からしや松葉吹こむ角槽
 青麦や一段高き駕籠立場
 夜さくらや揃ひ兼たる女子連
 白萩や日中も露をもつ風情
 斯ふ有ふかと思ふたよはつ氷
 間引菜ハ白髪夫婦の仕事哉
 急く針の隙をぬすミて炬燵哉
 火取虫や二度め八月に誉てやり
 炬塞や拭て納る自在竹
 投出すやうに窓から燕かな
 暖や夜なから降る雨静
 かすむ灘や白帆のさきは又かすミ
 二度来ても広野にたらぬ時雨哉
 世の浮気しつめて後や遅さくら
 入相の鐘ハものかハ鹿のこゑ
 五月雨や烟草脂濃く思ハるゝ
 から堀となる村裏や枯柳

一相 甘儲 指流 其生 雨琴 女 菱花 里和 都友 都友 東左

六オ

一相 其瀧 指流 其生 雨琴 女 菱花 里和 都友 都友 東左

「六ウ

「六オ

夕影と成て洩る日や夏木立
 月影の手入もたのし菊の宵
 乙鳥のかすつて出るや釣草鞋
 老僧の薪拾ふや小春潮
 水鳥や枝の一羽も影をませ
 ひと株の芋に幾日や一人り住
 五六日霞た果や雨となり
 一羽つゝ見れハちいさし渡り鳥
 日本てない葛水の器かな

七ウ

竹の子や取越てある開山忌
 本村と出村の間や苗代田
 ちらくくと葉越に涼し竹の月
 風のミてすむ里もあり初時雨
 行秋や雲高ふ見へ低ふ見へ
 秋雨や寝はくれハ老の常ながら
 留主をして重ね蒲団の奢り哉
 生壁を撫てよこるゝ柳哉
 算へ落す葉隠れハなき西瓜哉
 茶朝
 柳枝
 菊子
 佳山
 富月
 東郭
 礼舍
 可丈
 一方

七オ

竹の子や取越てある開山忌
 本村と出村の間や苗代田
 ちらくくと葉越に涼し竹の月
 風のミてすむ里もあり初時雨
 行秋や雲高ふ見へ低ふ見へ
 秋雨や寝はくれハ老の常ながら
 留主をして重ね蒲団の奢り哉
 生壁を撫てよこるゝ柳哉
 算へ落す葉隠れハなき西瓜哉
 茶朝
 柳枝
 菊子
 佳山
 富月
 東郭
 礼舍
 可丈
 一方
 夕影と成て洩る日や夏木立
 月影の手入もたのし菊の宵
 乙鳥のかすつて出るや釣草鞋
 老僧の薪拾ふや小春潮
 水鳥や枝の一羽も影をませ
 ひと株の芋に幾日や一人り住
 五六日霞た果や雨となり
 一羽つゝ見れハちいさし渡り鳥
 日本てない葛水の器かな
 石虎
 魯々
 魚潜
 冬扇
 現夢坊
 花眠
 滄洲
 一馬
 竹露

「七ウ

「七オ

雨の日や伊とくくく 赤尾 香月
 茸狩に子供と栗拾ひけり 香月
 境原 一興
 蓮池 都涼
 小城 画鳥
 牛津

八ウ

鮎と成て船に又出つ 桜海苔 文翅
 轟木
 長閑さや居眠る僧の笠に蝶 泥花
 湯豆腐に風味の付て梅の花 以風
 蝶々を蝶々の来て連て行 山甫
 秋の夕日赤はけ山に残りけり 快枝
 村田
 霞をハすくふて走る白帆かな 机睡
 墨染の袖に重みや霧の山 蘭雨
 雨の日や径をふさく糸薄 香月
 茸狩に子供は栗を拾ひけり 蘿月

八才

鮎と成て船に又出つ 桜海苔 文翅
 轟木
 長閑さや居眠る僧の笠に蝶 泥花
 湯豆腐に風味の付て梅の花 以風
 蝶々を蝶々の来て連て行 山甫
 秋の夕日赤はけ山に残りけり 快枝
 村田
 霞をハすくふて走る白帆かな 机睡
 墨染の袖に重みや霧の山 蘭雨
 雨の日や径をふさく糸薄 香月
 茸狩に子供は栗を拾ひけり 蘿月
 境原
 秋日和足音高き芦の蟹 一興
 蓮池 都涼
 水仙のきぬをぬかせる日和哉 都涼
 小城 画鳥
 菊見客其名もかほる人はかり 画鳥
 牛津

「八ウ

「八才

松より衣まひの折らぬ
 多れむや枝庭小屋のまは
 寺より猿の追はるゝ木の實かな
 眺めはへるさくらや松の後楯
 水番も雨から引て水鶏哉
 藻の花や川も次第に泥と成
 益山にちいさき波や露しくれ
 長閑さや苞火のほふ山畠
 塩田
 文定
 水哉
 岩水
 鷺水
 草露
 文徑
 魯童

九ウ

行春の姿隠すや晦日闇
 川船に酔ふ連もある涼ミ哉
 虫聞の客に減すや盆の布施
 鯉舟も走る月夜やほとゝきす
 長閑さや嶋の禿倉（ほころ）に願成就
 須古
 大町
 多久
 一雀
 荷雲
 松古
 一蝶
 芳雨
 水花

九オ

寐はくれて落栗の音算へけり

大町

一雀

行春の姿隠すや晦日闇

荷雲

川船に酔ふ連もある涼ミ哉

松古

虫聞の客に減すや盆の布施

一蝶

鯉舟も走る月夜やほとゝきす

芳雨

多久

長閑さや嶋の禿倉（ほころ）に願成就

水花

須古

枝ふりに裏表なき柳かな

文窓

茶の花や猪追小屋の前後

如鶴

寺にさへ猿の追はるゝ木の實かな

水哉

眺めはへるさくらや松の後楯

岩水

水番も雨から引て水鶏哉

鷺水

藻の花や川も次第に泥と成

草露

塩田

益山にちいさき波や露しくれ

文徑

長閑さや苞火のほふ山畠

魯童

「九ウ

「九オ

鶯やけさハ隣のものに鳴き
 雨ほしき畑ともしらて角力哉
 牛に乗て眠氣の出たり小春空
 白梅や向ふハ雪の片山家
 魚の濁す水か但しハぬるミ川
 一二輪茶にも茗や初しくれ
 つ、し咲や畑にハなせぬ伽藍跡
 長閑さや煎茶を貰ふ馬の上

十ウ

和らいた風筋見せる柳かな
 まき舌のよミ売もあり夕桜
 五丁田
 ほる里の子供や秋日和
 小田権
 長閑さに辻駕籠ハ皆なくれけり
 弓野
 廻担の両掛重し竿かしら
 武雄
 虎嘯
 筋夕
 蕉雨
 怨風

十オ

和らいた風筋見せる柳かな
 まき舌のよミ売もあり夕桜
 五丁田
 ほる里の子供や秋日和
 小田権
 長閑さに辻駕籠ハ皆なくれけり
 弓野
 廻担の両掛重し竿かしら
 武雄
 鶯やけさハ隣のものに鳴き
 雨ほしき畑ともしらて角力哉
 牛に乗て眠氣の出たり小春空
 白梅や向ふハ雪の片山家
 魚の濁す水か但しハぬるミ川
 一二輪茶にも茗や初しくれ
 つ、し咲や畑にハなせぬ伽藍跡
 長閑さや煎茶を貰ふ馬の上
 虎嘯
 筋夕
 蕉雨
 怨風
 雀翠
 子龍
 三枝
 睡虎
 観茶
 廬雪
 岬雨
 稀友

「十ウ

「十オ

袂より遠く〜はま原ありけ
 白きや白くぬも〜と
 雨ふりか〜何言の存候り
 伊万里
 腹立ち形も愛相か猫の恋
 筆子屋に墨の匂ひや五月雨
 有田
 もふぬるむ水や嗽ひの菌もします
 蝶々や雨晴の庭広ふ舞ひ
 完古
 花友

十一ウ

剛力に少しハ残せ岩清水
 朝の間の曇りハ散て暑さ哉
 はけ残る踊化粧の朝寝哉
 細ふなす庵の土瓶や暮の春
 山風のしつまる夜半や郭公
 本部
 雨の夜ハ寺に集る踊かな
 黛をひく松原や雉子の声
 蚊やり逃かてらに薬師参り哉
 白魚や白からぬ手に漁られ
 雨近ふなるかも海苔の薄湿り
 伊万里
 腹立ち形も愛相か猫の恋
 筆子屋に墨の匂ひや五月雨
 有田
 もふぬるむ水や嗽ひの菌もします
 蝶々や雨晴の庭広ふ舞ひ
 完古
 花友

十一オ

剛力に少しハ残せ岩清水
 朝の間の曇りハ散て暑さ哉
 はけ残る踊化粧の朝寝哉
 細ふなす庵の土瓶や暮の春
 山風のしつまる夜半や郭公
 本部
 雨の夜ハ寺に集る踊かな
 黛をひく松原や雉子の声
 蚊やり逃かてらに薬師参り哉
 白魚や白からぬ手に漁られ
 雨近ふなるかも海苔の薄湿り
 伊万里
 腹立ち形も愛相か猫の恋
 筆子屋に墨の匂ひや五月雨
 有田
 もふぬるむ水や嗽ひの菌もします
 蝶々や雨晴の庭広ふ舞ひ
 完古
 花友

「十一ウ

「十一オ

去のぬかして雨をくまや阿多 祖逸
 枝川に矢ととりて小鮎かな 魯笛
 一輪の影に闇もつ牡丹かな 逸女
 其影の縮む日中や藤の花 我桂
在東武 全
 鯉木の宮居つゝんて松の花 山姿
 水草の鉢の浪見て端居かな 左友
 いろくの名を束ねての花野かな 器水

十二ウ

桃さくや絵踏に集ふ庄屋の庭 嗽流
 葉柳の蔭を命や裏貸し家 奇流
 拍子よい碓や嫁にほしかられ 可吹
 当なしに出ても世ハ皆さくら哉 且山
 炉塞た夜やまた探る足の癖 知秋
 酒に代へて飲程ハなし庵の菊 露幽
 うすくと虹の消こむ枯野哉 逢故
 歩行好の手に杖蛸や暮の春 佳笑
 しのふ出して雨くれる夜や時鳥 岨逸
 枝川に筏をよけて小鮎かな 魯笛
 一輪の影に闇もつ牡丹かな 逸女

十二オ

深堀

桃さくや絵踏に集ふ庄屋の庭

嗽流

葉柳の蔭を命や裏貸し家

奇流

拍子よい碓や嫁にほしかられ

可吹

当なしに出ても世ハ皆さくら哉

且山

炉塞た夜やまた探る足の癖

知秋

酒に代へて飲程ハなし庵の菊

露幽

うすくと虹の消こむ枯野哉

逢故

歩行好の手に杖蛸や暮の春

佳笑

しのふ出して雨くれる夜や時鳥

岨逸

枝川に筏をよけて小鮎かな

魯笛

一輪の影に闇もつ牡丹かな

逸女

在京

佐嘉

其影の縮む日中や藤の花

我桂

在東武 全

鯉木の宮居つゝんて松の花

山姿

水草の鉢の浪見て端居かな

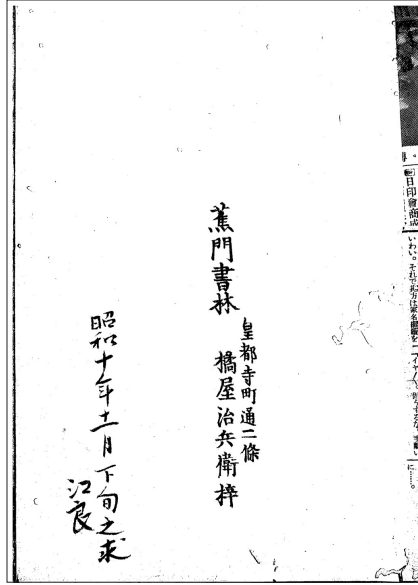
左友

いろくの名を束ねての花野かな

器水

「十二ウ

「十二オ



裏見返し

蕉門書林

皇都寺町通二條

橘屋治兵衛梓

裏見返し

二、史料解説

(一) 『香の霞集』とは

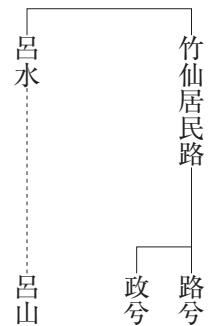
『香の霞集』は、縦二二・五cm、横一六・〇cmの表紙を除き一三丁から成る半紙本一冊である。表紙題簽は「追善香の霞集」と墨書され、扉の内題には追善の角書を冠し中央部は陰刻。天保九年（一八三八）二月二七日、六四歳で没した竹仙居民路の追善集で、編集者は息子路兮である。雲左坊の詞書によると、初忌日に五七五の追善会が息子路兮によって開催されている。同年、京都橋屋治兵衛の蕉門書林で上梓された。扉内題の下部に方形（三cm×三cm）の「江良蔵印」が朱く押され、裏見返しに新聞切抜が二枚貼付されて、「昭和十年十一月下旬之求、江良」の墨書がある。

はじめに述べたように、『香の霞集』の詞書は、佐賀美濃派四代宗匠雲左坊（十方庵画山・天保一一年一〇月五日没）が書き、識語は六代万頃園麦太（天保二年立机）が書いている。

一方、佐賀美濃派と並立した柳下園其翠の連中とも交際が深いことがこの追善集から想像される。四丁オモテと七丁ウラには、柳下園道統四代目花眠（二蝶園）の句がみられる。

(二) 『香の霞集』に参加した人々

① 竹仙居民路の家族



民路の弟呂水は、「不幸にして病身となり、官を辞し」と四丁ウラに書いているところから、竹仙居民路は佐賀藩士であったと考えられる。

② 追善参加者のうち武士階級と思われる者

『香の霞集』に掲載された俳名のうち、次の一人が武士階級ではないかと『佐賀県近世史料第九編第一巻』俳諧編から推量した。一人のうち、俗称等が分かる者は五名である。一覧にして向後の参考とした。

其生 公木舎其生。佐賀美濃派五代宗匠竹如亭伊此（耳風坊・深江種

徳・天保八年五月二九日、七七歳没）の甥。

文翹 白梅廬文翹。五代宗匠竹如亭伊此（耳風坊・深江種徳）の子。

石虎 松竜居石虎。五代宗匠竹如亭伊此（耳風坊・深江種徳）の子。

烏川 五代宗匠竹如亭伊此の子、白梅廬文翹の弟。

一相 三秀園一相

指流 移光亭指流

以夕 交友舎以夕

魯々 欲仙窟魯々

魚潜 六々園魚潜

燕二 其日庵燕二

仙風閣 仙風閣寛翹「…当時の俳書にしばしば名を出す仙風閣寛翹、支藩鹿島藩主八代鍋島直宜であろう」（『佐賀の文学』六三頁）。

③地域の俳人たち

『香の霞集』に参加した地域の俳人について別表1を作成した。各俳人については『佐賀県近世史料第九編第一巻』の俳諧編から情報を拾い、それぞれの地域の成り立ちや特性も書き入れ、各地域の俳人や地域性に対する理解の一助となるよう試み、天保九年当時、佐賀藩内の美濃派俳諧活動を支えた俳人たちを一覧できるようにしてみた。

別表2は、伊万里美濃派俳諧歴代宗匠について調べて作成した。

佐賀美濃派初代十知庵苔峨（花房良庵）が、宝暦七年（一七五七）に初めて美濃派俳諧と遭遇した伊万里の地で、どのように美濃派俳諧が引き継がれてきたか、その一端を著した。

おわりに

佐賀美濃派六代目宗匠万傾園麦太の親友であった竹仙居民路居士の追善『香の霞集』を翻刻発表することができた。

追善の句を寄せた二〇の地域と四八人の俳人について書いていく中で、十一丁ウラにでてくる有田の俳人、完古とは、新橋（北方町志久）の竹遊軒千鶏（川原氏）なる人物の子、俗名川原善右衛門（十代）ではないかと推量された⁸⁾。

深堀の嗽流が詠んだ「桃さくや繪踏に集ふ庄屋の庭」の句は、今しも庄屋役宅の庭で「踏絵」が行われんと村人が参集し、その庭には例年通り桃

が咲いている情景である。この「踏絵」の句は、長崎の土地柄や時代背景が色濃く反映している作品として心に残った。

これからも佐賀藩研究の一端として、佐賀美濃派に関わる研究を進めたい。

謝辞

この論考を書くにあたっては、田中道雄先生に多大なご教示をいただきました。記して感謝いたします。

（佐賀歴史研究会会員）

参考文献

川崎千虎手写「伊万里歳時記・花島芳樹随筆抄写」（明治二九年…一八九六年、長崎歴史文化博物館蔵）

参考文献

田中道雄「佐賀美濃派俳諧の展開―深江文庫の紹介をかねて―」（『佐賀大国文』第三六号、二〇〇八年）
 多久島澄子「佐賀美濃派俳壇誕生前夜の地・伊万里」①―明治十四年暮に詠まれた俳句に寄せて―（『葉隠研究』七七、二〇一四年）、③―山本源右衛門が遺した資料を中心に―（『葉隠研究』七九、二〇一五年）、⑤―半升庵鼎山戸映雪軒富麓―（『葉隠研究』八一、二〇一六年）、⑥―山本家所蔵今泉千秋の八雲御抄写―（『葉隠研究』八二、二〇一七年）、⑧―筑紫流箏曲の伝承者たち藩主とその周辺―（『葉隠研究』八四、二〇一八年）。⑨―筑紫流箏曲有田郷の伝承者川原黙斎と横尾謙―（『葉隠研究』八五、二〇一八年）。

参考文献

- 下中邦彦編『日本歴史地名大系第四二巻佐賀県の地名』平凡社、一九八〇年
 竹内理三編『角川日本地名大辞典41佐賀県』角川書店、一九八二年
 大内初夫『近世九州俳壇史の研究』九州大学出版会、一九八三年
 松本源次『松本庄之助伝―有田皿山激動記』麦秋社、一九八三年
 松本源次『有田陶業側面史（明治編）―松本静二の生涯―』麦秋社、一九八三年

- 『佐賀の文学』新郷土刊行協会、一九八七年
 佐賀県立図書館『佐賀県近世史料第九編第一巻』二〇〇四年
 公益財団法人鍋島報効会『藩祖鍋島直茂公と日峯社』二〇一七年

【註】

- (1) 「佐賀美濃派俳諧の展開―深江文庫の紹介をかねて―」、『佐賀大國文』三六号、二〇〇八年
 (2) 洋学堂（佐賀市新栄西二・八・四四）は佐賀神社前にあった増田敬文館から仕入れた。
 (3) 『佐賀県近世史料』第九編第一巻、二〇二頁、二〇〇四年
 (4) 『佐賀県近世史料』第九編第一巻、二三四頁、天保二年吉田皿山の青葉庵苔水の古稀の賀集『常盤の青葉』に、「楞庵古童」とある。二五一頁、天保九年十方庵雲左編雲左坊（画山）の古稀賀集には、「古童改鼎山」と改称している。
 (5) 田中道雄氏は「佐賀美濃派俳諧の展開―深江文庫の紹介をかねて―」の稿末に、五七冊の「佐賀美濃派刊行俳書目録」（共表紙横本の佐賀県内に伝存するもの）を発表。
 (6) 大内初夫『近世九州俳壇史の研究』（九州大学出版会、一九八三年）の付録に、九州俳書（近世期を主としこれに明治の旧派のものを含め大体九州在住の俳人によって著わされた俳諧所）を主とし、目録類によって書名のみ知られるものを加え五十音順に配列された七四一冊が記されている。

- (7) 常照精舎とは、現佐賀市本庄町鹿子二〇六番地三の日蓮宗妙光山常照院のことである。旧本山は佐賀市高木町の観照院。佐賀藩藩祖鍋島直茂正室陽泰院実父石井常延墓所、佐賀俳諧の先駆者第二代藩主光茂の御歌書役石井如自墓所。

- (8) 『佐賀の文学』六四頁には、「文政三年に没した新橋（現北方町志久）の竹遊軒千鶏（川原氏）は、皿山に小店を持ち、「所々に大家をかまへ…活花を翫び…茶事に心を養…佳樹芳草を集め石台に移し砂鉢に培」（『追善冬牡丹』）う趣味豊かな富者だった」とある。

- 多久島澄子「佐賀美濃派俳壇誕生前夜の地・伊万里⑨―筑紫流筆曲・有田郷の伝承者川原黙齋と横尾謙―」、『葉隠研究』八五号、九一頁、川原家は八代善助（享和二年・一八〇二没）が、有田皿山酒造請元の権利を取得した渡辺家から派遣され芦原（北方町）から有田に移り酒造業を始めた。九代善之進は文政三年卒なので、竹遊軒千鶏とは川原善之進と考えられる。十代川原善右衛門、諱源、号黙齋が、完古の可能性が大きい。善右衛門は、有田十唱（一から十までの数え歌）の十番に「十徳は黙齋」と謳われた。川原家は有田皿山では古酒場と呼びならわされ、主黙齋は茶人として常に十徳を着用していたことからこのように謳われた。この時代、川原家は焼物焼成の釉薬原料、柞灰の専売権で多大な財を得た。

- (9) 『精選版日本国語大辞典』によれば、踏絵とは江戸時代キリシタン宗門を厳禁するために長崎などで正月四日から八日まで、マリア像、キリスト十字架像などを木板または銅板・真鍮板に刻み、足で踏ませてキリスト教の信徒でないことを証明させたこと。寛永五年（一六二八）から安政五年（一八五八）まで毎年行なわれた。春の季語。

別表1 地域の俳人たち

多久島澄子作成

地名	解説	俳名	出典
轟木	現鳥栖市轟木町、佐賀藩東端の宿駅として栄た。養父郡のうち、佐賀本藩領。	泥花 以風	釈泥花、天保11年竹如亭耳風居士三回忌追善『空蟬集』 天保12年十方庵雲左坊追善『仰魂集』
村田	現鳥栖市村田町、養父郡のうち、佐賀本藩領。鍋島勝茂の十一男直長の子茂快を初代とする佐賀藩親類四家の一つ村田鍋島家の知行地。	机睡 蘭雨 羅月	天保11年竹如亭耳風居士三回忌追善『空蟬集』 〃 〃
境原	現神埼市千代田町境原、神埼郡のうち、佐賀本藩領。西郷に属す。商家・民家が150戸ほど軒を連ねる宿駅で数珠が名物であった。		
蓮池	現佐賀市蓮池町、中世には小田氏の居城。江戸期には勝茂三男直澄を初代とした三支藩の一つ蓮池藩主の御館を中心に形成された城下町。	都涼	琴松庵都涼、天保2年吉田山年賀『常盤の青葉』
小城	現小城市小城町、小城郡のうち、小城藩領と佐賀本藩領。北郷に属す。 勝茂の長男元茂を初代とした三支藩の一つ小城藩の城下町。	画鳥	松雲舎画鳥、文政7年十方庵編『笠の露』
牛津	現小城市牛津町、小城郡のうち、小城藩領。平吉郷に属す。商業と水陸交通の要地で物資の集積地として戦国末期以来繁栄した。	一松	夜雨亭一松、文政7年十方庵編『笠の露』
大町	現杵島郡大町町、杵島郡のうち、佐賀本藩領。横辺田郷に属す。享和元年、横辺田代官所が設置され、文化2年から文政12年までの25年間の廃止を経て天保元年に再度設置された。	荷雲 松古 一蝶 芳雨	文政7年十方庵編『笠の露』 〃 〃 〃
多久	現多久市、小城郡のうち、佐賀本藩領。上多久郷に属す。龍造寺長信を領祖、その子多久安順を初代とする親類同格四家の一つ多久家の知行地。	氷花	文政7年十方庵編『笠の露』
須古	現杵島郡白石町、杵島郡のうち、佐賀本藩領。須古郷に属す。龍造寺信周を初代とする親類同格四家の一つ須古鍋島家の知行地。	器水	平生舎器水、文政7年十方庵編『笠の露』
塩田	現嬉野市塩田町、藤津郡のうち、蓮池藩領。塩田郷に属す。蓮池藩は西目（藤津郡・杵島郡）に所領が多かったため西目統治の頭人役所を置いた。 塩田は政治経済の中心となった。 塩田川の河口として繁栄した。	魯堂 文径 蕉雨 怨風	錦江亭魯童（江口平兵衛）は塩田東山の皿山を再興した商人 文政10年耳風坊文台開『夏木立』 雪窓下文径、文政10年耳風坊文台開『夏木立』 ■（虫損）橋園蕉雨、文政10年耳風坊文台開『夏木立』 天保2年吉田山年賀『常盤の青葉』
五丁田	現嬉野市塩田町、藤津郡のうち、蓮池藩領。塩田郷に属す。	茄夕	文政10年耳風坊文台開『夏木立』
小田稚	現武雄市西川登町小田志、杵島郡のうち、佐賀本藩領。武雄郷に属す。 小田稚村は大河内山とよばれ窯業関係者のみの村。	虎嘯	香風観虎嘯、天保2年吉田山年賀『常盤の青葉』
弓野	現武雄市西川登町弓野、小田志村に属し天保の頃武雄領に納めた運上小物成は小田志が六割、弓野が四割であった。	逸翹	柳々舎逸翹、天保2年吉田山年賀『常盤の青葉』
武雄	現武雄市武雄町、杵島郡のうち、佐賀本藩領。武雄郷に属す。龍造寺隆信の子後藤家信を領祖とする親類同格四家の一つ武雄鍋島家の知行地。	雫翠 子龍 睡虎 三枝	南薫窓雫翠、天保7年十方庵古稀『年賀集』 天保2年吉田山年賀『常盤の青葉』 天保2年吉田山年賀『常盤の青葉』 天保7年十方庵古稀『年賀集』
嬉野	現嬉野市嬉野町、杵島郡のうち、佐賀本藩領と蓮池藩領。 長崎街道二四宿の一つで温泉を有す宿駅。	観茶 慮雪 岬雨 稀友 樸史	天保7年十方庵古稀『年賀集』 天保7年十方庵古稀『年賀集』 松風慮岬雨、天保2年吉田山年賀『常盤の青葉』 香雪園稀友、天保2年吉田山年賀『常盤の青葉』 一洞舎樸史、蓮池藩士、天保7年十方庵古稀『年賀集』
吉田	現嬉野市吉田、藤津郡のうち、蓮池藩領。吉田郷に属す。	苔水 戸牛 孚雪 二蝶	青葉庵苔水、文政7年十方庵編『笠の露』 東山亭斗牛、天保2年吉田山年賀『常盤の青葉』 天保2年吉田山年賀『常盤の青葉』 天保2年吉田山年賀『常盤の青葉』
本部	現武雄市若木町本部、杵島郡のうち、佐賀本藩領と蓮池藩領。川古郷に属す。	芦川 一嘯 耕雲 菊路 李径	天保7年十方庵古稀『年賀集』 文政7年十方庵編『笠の露』 文政7年十方庵編『笠の露』 文政7年十方庵編『笠の露』 隣山居李径、文政7年十方庵編『笠の露』
伊万里	現伊万里市伊万里町、松浦郡のうち、佐賀本藩領。伊万里郷に属す。 元禄3年伊万里心遣役を任命し手頭を發し厳格な行政を敷いた。伊万里津には藩の船蔵が設置され陶磁器買付の諸国商人の出入が激しかった。天保6年陶磁器積出は約32万俵。 陶磁器商は天保期80人、明治5年91人で、伊万里町総戸数のほぼ一割。	文路 古童	呉雪庵文路、一番ヶ瀬啓右衛門、伊万里美濃派俳壇二代目宗匠 文政7年十方庵編『笠の露』に投句、文政12年に『世事の凍解』を編む。 栲庵古童、中村勘二、文政7年十方庵編『笠の露』に投句 文路から文台を引継ぎ半升庵鼎山を名乗り、三代目宗匠として明治7年3月11日急逝まで30年近く伊万里美濃派俳壇を牽引した。
有田	現西松浦郡有田町、松浦郡のうち、佐賀本藩領。有田郷に属す。皿山とは陶磁器生産地を意味し有田皿山は有田陶磁器生産地の諸村の総称。有田皿山代官所は正保5年から明治維新まで続いた。	完古 花友	笑裏庵完古、文政7年（1824）十方庵『笠の露』の住所は新橋（現武雄市北方町）だが、天保9年（1838）には有田、天保12年『仰魂集』は有田山である。 女性、文政7年（1824）十方庵『笠の露』の住所は新橋（現武雄市北方町）、天保9年（1838）には有田である。
深堀	現長崎県長崎市深堀町、佐賀藩家老鍋島左馬助が治めた知行地。	嗽流 奇流 可吹 魯笛 逸松	天保12年十方庵雲左坊追善『仰魂集』 文政10年耳風坊文台開『夏木立』 天保12年十方庵雲左坊追善『仰魂集』 天保12年十方庵雲左坊追善『仰魂集』 文政10年耳風坊文台開『夏木立』

別表2 伊万里美濃派俳諧宗匠系図

多久島澄子作成

	名前	俳号	生年月日	西暦	没年月日	西暦	享年	職業・住所
初代	藤田正兵衛（八代）	涼月下松扉	明和元年	1764	文政8年3月5日	1825	62	薬種商、上土井町（かみどいまち）
二代	一番ヶ瀬啓右衛門	呉雪庵文路	明和5年	1768	天保15年3月27日	1844	77	紙商、中町（なかまち）
三代	中村勘二	半升庵鼎山	寛政12年	1800	明治7年3月11日	1874	75	書店太古堂、上中町（かみなかまち）
四代	岩本佐兵衛（三代）	羅月園指井			明治12年12月27日	1879		陶商、下町（しもまち）
五代	中村勘兵衛（二代）	黄鳥舎梅宇	天保2年	1831	明治41年	1908	78	呉服・金物・農具・荒物 雑貨・度量衡器等を商う富野屋、上中町

出典 長崎歴史文化博物館蔵『伊万里歳時記花鳥芳樹随筆抄写し』、『西の雲』、『招く魂集』、『恩のわかれ』、藤田家墓碑銘、「伊万里歳時記」卷之三（『伊万里市史』続編969～978頁）、松本源次『有田陶業側面史—松本静二の生涯—』上編。